

使用頻度に基づく学術共通語彙テストの開発と実施

— 国立大学の学生と、国立大学へ入学する韓国人日本語学習者を対象にして —

Development and Implementation of a Japanese Common Academic Word Test
Based on Word Frequency: A Case of Japanese and Korean Students

○佐藤 尚子^{※1} 田島 ますみ^{※2} 松下 達彦^{※3} 笹尾 洋介^{※4} 橋本 美香^{※5}

SATO, Naoko TAJIMA, Masumi MATSUSHITA, Tatsuhiko
SASAO, Yosuke HASHIMOTO, Mika

キーワード：学術語彙、日本語学術共通語彙テスト、使用頻度、高等教育

Keywords: academic word, Japanese common academic word test, word frequency, higher education

1. はじめに

田島ほか (2015)、佐藤ほか (2017) では、日本人大学生の一般的な語彙量を測定してきた。低頻度語でも日常生活で使用されている語彙は必ずしも正答率は低くなかった¹⁾²⁾。そこで、より弁別力のあるテストを開発するには対象語を学術系の語彙に絞ることが有効であると考え、学術語彙を用いたテストを開発・実施することとした。

本発表では、(1)「学術共通語彙テスト」の開発、(2)国立大学で学ぶ日本語を母語とする日本人学部学生(以下、日本人学生)および韓国での6か月の日本語予備教育を終了した直後の韓国人日本語学習者(日韓共同理工系学部留学生)(以下、日韓生)^{註1}が、どの程度学術語彙を理解しているか、について報告する。

2. 日本語学術共通語彙テストの開発

本発表で取り上げる学術共通語彙とは、一般的なテキストに比べて学術的なテキストでより高い使用率を占める語彙を指す。松下 (2011) が日本語の大規模書き言葉コーパスから計量的な手法によって抽出した「日本語学術共通語彙リスト」をもとに開発を行った³⁾⁴⁾。その有用性はテキストカバー効率によって実証されている⁵⁾。

テストの対象語は一般語彙も含めた総合的なデータベースにおける使用頻度順位を基準に選定した。頻度順位上位2万語の中から250語に1語を抽出することとし、可能な限り頻度順が等間隔に近づくように抽出した。そのようにして得られた80語から、日本語教育で初級語彙とされる頻度順位1285位以上の5語を除いた75語を対象語とした。

テストの形式は対象語の意味を問う3肢選択問題である。選択肢は、意味的に類似性の高い選択肢を並べ、より正確な意味知識を必要とするものにした。

3. テストの実施

前述のように作成したテストを、2016年4月から10月にかけて国立大学2校の日本人学生(文系学部生も含む)81名に対して、また、2016年8月に韓国で日韓生100名に対して実施した。「母語は日本語」と回答した日韓生1名を除き99名を分析対象とした。

4. 結果と考察

テスト結果の基礎統計量を表1に示す。1問1点とした75点満点のテストで、国立大学の日本人学生は、平均点68.7、最高点74、最低点60、標準偏差

表1 素点の基礎統計量

	平均点	最高点	最低点	標準偏差
日本人学生 (81名)	68.7	74	60	3.09
日韓生 (99名)	53.9	72	23	10.3

※1 千葉大学国際教養学部准教授

※2 中央学院大学法学部准教授

※3 東京大学大学院総合文化研究科准教授

※4 豊橋技術科学大学総合教育院准教授

※5 川崎医科大学医学部准教授

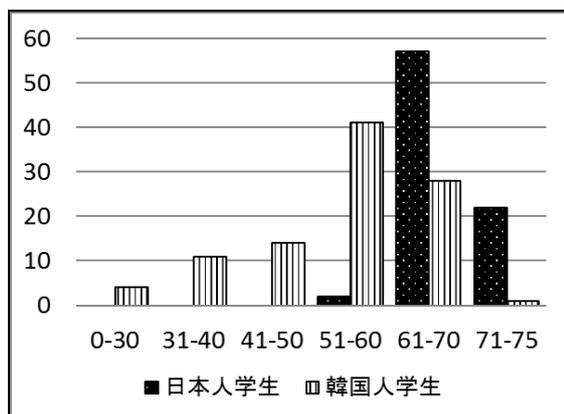


図1 日本人学生と韓国人学生(日韓生)の得点分布

3.09であった。

図1は日本人学生と日韓生の得点分布である。

日本人学生は高得点者が多く、2万語レベルの学術語彙であれば、ほとんど問題なく理解していると言える。一方、日韓生は、平均点53.9、最高点72、最低点23、標準偏差10.87だった。得点が50点以下の日韓生は29名だった。日韓生については、上位層は日本人学生とほぼ同等に学術語彙を理解しているのに対して、下位層は日本人学生との最低点との差が大きく、学部入学後に、日本人学生と同様に授業を理解していくためには、渡日後6か月行われる予備教育期間中にこれらの学術語彙を習得していく必要があると考える。

また、それぞれの語の日本人学生と日韓生の正答率を見ると、表2に挙げた6語は正答率の差が50%以上だった。これらの語は日本人学生の半分程度しか日韓生は理解できていないということである。それに対して、「スコア」「林野」「順序」などは日

表2 正答率に50%以上差があった語

	対象語	頻度 順位	日本人 正答率 (%)	日韓生 正答率 (%)	日本人 日韓生 差
1	間引き	13,114	98.8	32.3	66.4
2	粗-	13,887	92.6	31.3	61.3
3	貢献	2,624	98.8	40.4	58.4
4	かなう	10,623	97.5	44.4	53.1
5	テーゼ	15,636	79.0	26.3	52.7
6	懸念	5,377	100.0	49.5	50.5

韓生の方が、正答率が高かった。これらの語については、日本人学生は正確な意味を理解していない可能性があると思われる。

5. まとめ、教育への示唆と今後の課題

今回、対象語とした75語には、実際、その意味を知っていなければ学術的な活動全般に支障を来すものと、相対的に影響が限定的だと考えられるものの2つのタイプのもが存在する。表2に挙げた語彙からみれば、出現頻度の高い「貢献」「懸念」は前者にあたり、低い「間引き」「テーゼ」などは後者にあたるだろう。出現頻度が高く、学術活動全般に大きく関わる語については習得させておくべきである。

今後は、各種のテストの結果と照合するなどして、どの程度の得点であれば、大学の学びが円滑に行われるのかを明らかにしていきたいと考えている。

(メールアドレス sophia@faculty.chiba-u.jp)

注

注1 日韓生は、9月下旬に渡日し、6か月の日本語予備教育を受けた後、国立大学の理工系学部に入學する。

参考文献

- 1) 田島ますみ・佐藤尚子・橋本美香・松下達彦・笹尾洋介：
日本人大学生の日本語語彙量測定の試み，中央学院大学
人間・自然論叢，No.41，pp.3-20（2016）
- 2) 佐藤尚子・田島ますみ・橋本美香・松下達彦・笹尾洋介：
使用頻度に基づく日本語語彙サイズテストの開発
（50000語レベルまでの測定の試み），国際教養学研究，
千葉大学（2017，印刷中）
- 3) 松下達彦：日本語学術共通語彙リスト Ver1.01，
[http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/Vocabulary
Room/index.html](http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/VocabularyRoom/index.html)（2016年12月24日参照）
- 4) 松下達彦：日本語の学術共通語彙（アカデミック・ワ
ード）の抽出と妥当性の検証，2011年度日本語教育学
会春季大会予稿集，No.41，pp.244-249（2011）
- 5) 松下達彦：コーパス出現頻度から見た語彙シラバス，ニ
ーズを踏まえた語彙シラバス（森篤嗣編），くろしお出
版，pp.53-77（2016）

*本研究はJSPS 科研費 15K02631の助成を受けた。